

世界人と成るべし

海田町名誉町民 織田幹雄氏をたどる

第6回

**スポーツは、楽しいけれども、一方で
勝つことは、記録を作る以上に難しい。**

織田さんの選手生活12年間の後半生は、けがとの戦いでした。しかし織田さんは、けがが記録を伸ばすとも言っていない。今回はオリンピッククアムステルダム大会後から引退までを辿ります。

**早稲田大学競走部のキャプテン
となる**

金メダルを獲得したオリンピッククアムステルダム大会を区切りに部を辞めるつもりだった織田さんでしたが、キャプテンとなったので、辞めることが出来ませんでした。1930年にドイツで行われた第4回国際学生大会に幹事として参加しました。この欧州遠征が織田さんを2つ目の金メダルに向かわせました。

社会人選手織田幹雄誕生

早稲田大学卒業後、1931年に朝日新聞大阪本社に入社しました。この年は練習を楽しみつつ、三段跳びに精進し、世界記録を突破するために、ホップ（1歩目）ステップ（2歩目）ジャンプ（3歩目）の跳躍距離の比

率を6・4・5とし、フォームの完成に力を注ぎました。

世界新記録の偉業も日本人第1号

世界記録更新は、1931年10月27日に開催された神宮体育大会でした。織田さんはこの時、三段跳びで15m58cmの世界新記録を跳びました。この時の比率がホップ6m34cm、ステップ4m7cm、ジャンプ5m17cmでした。オリンピックでの金メダル獲得だけでなく、世界記録の日本人第1号も織田さんとなったのです。

オリンピックロサンゼルス大会は、コーチ兼選手

1932年の3月に台湾に指導と練習を兼ねて出かけた時、けがをしてしまい、回復が思

わしくなかった織田さんは、同年のオリンピックロサンゼルス大会出場を諦めていましたが、コーチを兼ね主将として参加することとなりました。大会当日まで回復せず、予選落ちとなったものの、親友の南部さんが15m72cmの世界新記録を跳んで優勝し、三段跳びで日本が2連勝したのでした。

**オリンピックロサンゼルス大会
後引退**

1932年9月29日の日記から

「オリンピックに以って自分の過去は清算された。新しい第一歩を踏み出す。」

九月二九日湯河原にて「このように書き、織田さんは12年間の選手生活に幕を閉じました。」



▲アムステルダム大会の金メダル



▲オリンピックロサンゼルス大会に応援に来た海田町出身の人々と

